

共立女子大学所蔵アイヌ服飾資料の概要について

About the outline of Kyoritsu Women's University owning Ainu's dress and accessories

宮澤俊恵・伊藤紀之

Toshie MIYAZAWA and Noriyuki ITO

1. はじめに

2008年6月6日、「アイヌ民族を先住民とすることを求める決議」が衆参両議院で採択され、政府がこれを受けて「アイヌ民族は先住民族であるとの認識」を発表した。この発表は、以前から行われてきたアイヌ民族が先住民族であるかどうかという議論に対して、国会や政府がアイヌ民族は日本の先住民族であると認めたことを表している。これを受け、2009年7月には政府の有識者懇談会により、アイヌに対する根強い偏見や差別をなくすため、学校教育においてアイヌの歴史・文化の基礎的な知識が習得できるように学習指導要領の改訂を実施することなどが求められた。今、アイヌの歴史や文化を学び理解し、尊重することが求められている。

研究目的と方法

本稿では、共立女子大学に所蔵されているアイヌ服飾資料について観察や文献による調査を行い、その概要を明らかにすることを目的とする。なお、これらの資料は過去2回（2005年2～4月及び2009年7～9月）本学展示室にて公開されている。

2. アイヌについて

まず「アイヌ」とは、アイヌ語で「人間」という意味の尊称である。アイヌ人は古くから北海道を中心に、東北北部、千島、サハリン（樺太）に居住し、自然と深い関わりをもって固有

の文化を育んできた。松前藩によって交易の自由を規制され、場所請負制のもとで、漁場での低賃金労働に従事させられた時代でも、生活の面ではアイヌ独自の文化を維持していた。

しかし、幕末の幕府直轄支配を経て明治維新以降になると、アイヌ人の居住域は開拓の対象となり、信仰の自由を奪われ、クマの霊送りなどの儀礼や、アイヌ伝統の習俗は禁止された。そして日本語の習得を定められ、同化を余儀なくされたのである¹⁾。現在においてもアイヌ人の生活保護率は5.2%で、全国平均の2.1%を大幅に上回るといった現状があるという²⁾。

3. アイヌの衣服について

同化政策といった背景により、大胆な文様を施した伝統的な衣服のアイヌ文様構成法も、明治から大正時代にかけてしだいに忘れ去られたと考えられている³⁾。なお、現存する文様が施されたアイヌの伝統的な衣服の多くは、儀礼などの晴れの日に着用されていたものと考えられる。

アイヌの衣服において大きな特徴は、形状による男女の区別がないという点である。また形状だけではなく、衣服に施された文様にも明確な男女の区別はない。多少みられた違いでは、男性は文様の多いものを、女性は控えめなものを着用していたようだ⁴⁾。男女の区別がないことは、他の民族と比較して特筆すべき点である。

主な形状は、丈は膝下からくるぶし辺りまでの長さがあり、袖は、アイヌの人々が着用した

ものに関しては主にもじり袖であった。着用の仕方は、深く打合せず軽く前を合わせ細帯で結ぶか、モウルと呼ばれる家庭着の上に羽織るように着る。アイヌの衣服は、素材や仕立て方によって、名称が異なる。

4. 資料の調査結果

本学に所蔵されているアイヌ服飾資料の内容は以下の通りである。

- ・アットゥシ 3 領
- ・チカラカラベ 1 領
- ・カバラミフ 1 領
- ・マエタリ 2 枚
- ・首飾り 2 本
- ・耳飾り 1 組

これらを調査した結果についてそれぞれ述べる。なお、調査にあたっては2008年9月に北海道立アイヌ総合センター学芸員、津田命子氏にご教授いただいた。その結果を中心に報告する。

4-1-1. アットゥシについて

アットゥシは、アイヌ語で「アツ（オヒョウ

ニレ）ルシ（木の皮）」という意味だといわれている通り、オヒョウ、シナノキなどの木の皮繊維で織られた衣服である。紺の木綿糸や草木で染めた靱皮繊維を部分的に経糸に加えて織られた縞のアットゥシも多くみられる。形態は単衣で和服と似ているが、衿がない。そして、模様は衿、袖口、裾に布を置き縫いとめ、その上から木綿糸でチェーンステッチやコーチングステッチによる刺繍を施している。模様の形成に使われる素材の多くは、紺や黒地の木綿布や木綿糸である。重く保温に適さないオヒョウなどと比べ、木綿は軽く保温にも適しているが、アイヌ人の居住地域では寒冷な気候により栽培できないため、アイヌ人にとって貴重な素材であった。そのため、大陸や本州から入ってきた木綿を大切に無駄なく使用していた。

またアットゥシは、アイヌ人と和人の主要な交易品のひとつとして扱われた衣服でもあった。北前船で往来する人々に好まれていたようで、和人の求めに応じて作られたものには、広袖立てのものが多くみられる。図1～3は広袖で

表1 共立女子大学所蔵アイヌ服飾資料〈衣服〉

資料	寸法(cm)		素材	年代(推定)	制作地(推定)	調査から分かったこと
	丈	桁				
アットゥシ1	125	65	オヒョウ・木綿	19世紀初	樺太	・構成法から和人のために制作されたと考えられる ・使用された跡があり、傷みの補修はアイヌ人の可能性があり ・刺繍が袖底に巻き込まれているため、袖は長く作ったものを切った形跡がある
アットゥシ2	120	64	オヒョウ・木綿	19世紀初～ 19世紀後半 (江戸末期)	樺太	・オヒョウの色の濃淡で意識的に縞柄が作られている ・紺に紺を使用している ・袖の刺繍が繋がっている正統な制作方法
アットゥシ3	108	58	オヒョウ・木綿	19世紀初～ 19世紀後半 (江戸末期)	樺太	・刺繍は一筆書きではない(江戸末期には一筆書きが多い) ・紺の木綿糸を使用した縞柄である
チカラカラベ	137	61	木綿	19世紀後半(江戸末期)以降	—	・和服にアイヌ人が刺繍したものと考えられる ・刺繍は一筆書きで施されている
カバラミフ	124	65	木綿・モスリン	1880年頃	日高東部～静内の農屋地方	・使用感があるため実際に着用されていたものと考えられる ・袖口にモスリンが使用されている ・衿に芯が入っていないため当時のものであると考えられる

あるため、和人向けに作られたものであろうと考えられる。

所蔵資料のうち衣服の調査結果を表1に示した。まず、アットゥシ1(図1a,b)は、袖の刺繍が袖底に巻き込まれており、刺繍を施した後に袖底を縫った形跡がある。これを特筆した理由は本来、袖の様子は袖を作ってから刺繍を施すため、刺繍が袖底に巻き込まれることはないからである。しかし、この資料でこのような制作方法がとられたことは、制作者が袖の長さが分からず作り、後から長さを切って修正したことを意味するのではないだろうかと津田氏は推測された。

アットゥシ2(図2a,b)は、糸の濃淡による縞柄が特徴的である。オヒョウの繊維で反物を織る際に、オヒョウの木の内皮を温泉や沼などに浸けて柔らかくし、薄く裂き撚りを掛けて糸にしたものを織機に掛けて織る。その温泉などに浸ける時に、繊維が酸素にふれるのが早い場合には濃く、遅い場合には薄い色になる。その濃淡を規則的に配して縞柄に織られたものがこのアットゥシである。また、アットゥシ1と比較して見ると、本来の方法により制作されており、袖底の刺繍が繋がっていることがみてとれる。

アットゥシ3(図3a,b)は、紺の木綿糸によ



図1a アットゥシ1(前面)



図1b アットゥシ1(後面)

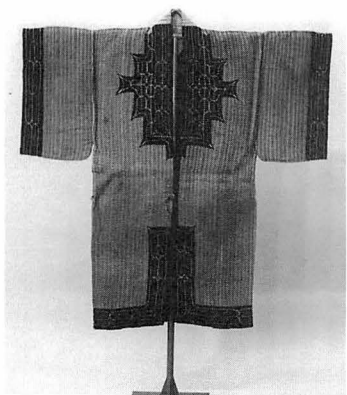


図2a アットゥシ2(前面)



図2b アットゥシ2(後面)

る縞柄である。このような縞柄は江戸末期頃からみられる。しかし、施されている刺繍が江戸末期頃から多くみられるようになった一筆書きではないため、縞柄の出現し始めた頃のものではないだろうかと推測される。

4-1-2. チカラカラペについて

次にチカラカラペはアイヌ語で「チ（我々）カラカラ（作りに作った）ペ（もの）」という意味である。元々、和服に刺繍を施したものであったため、衿のついた木綿衣である。アットゥシと同様、木綿の置布の上に木綿糸で刺繍が施されている。所蔵のチカラカラペ（図4 a,b）は、刺繍が一筆書きで施されており、江戸末期以降

の作であると推測される。

4-1-3. カバラミフについて

同じく木綿衣であるカバラミフは、アイヌ語で「カバラ（薄い）ミフ（着るもの）」という意味である。アットゥシなどと比較して薄いことが由来している。日高地方で盛んに作られたカバラミフは、広幅木綿を切り抜いてから、衣服に重ねて縫い付け、その上から主にコーチングステッチによる刺繍が施されている。白い木綿布を用いることが多いため、カバラミフは比較的華やかな印象を持つ。所蔵のカバラミフ（図5 a,b）は衿と袖口にはモスリンが使われている。また、衿に芯が入っていないため19世紀



図3a アットゥシ3（前面）



図3b アットゥシ3（後面）



図4a チカラカラペ（前面）



図4b チカラカラペ（後面）

後半のものであると考えられる。現代において復元されたものは衿に芯を入れたり、刺し子が施されていたりすることからこのような推測ができる。

4-2. マエタリについて

マエタリと呼ばれる前掛けはアットゥシと同様に、オヒョウやシナで作られている。女性だけが使用するという地域もあるが、明治期に撮影された写真において樺太アイヌの男性が使用していることから、男女共に使用されたものであろうと考えられている⁵⁾。所蔵のマエタリ1(図6)の素材はオヒョウであり、制作年代は江戸末期から明治期頃のものとして推定される。

一方、マエタリ2(図7)の素材はシナである。紐が通常はアイヌでは墓標に巻く紐として使われる4本編みであり、マエタリの紐として使用することはない。このことから、このような習慣を認識していない現代の制作者により作られたものであろうと考えられる。

4-3. 首飾りについて

首飾りは儀礼の際に女性が身に着ける。首飾りにはタマサイとシトキの2種類がある。タマサイは玉のみが連なった首飾りをさす。シトキは、中央に飾り板を配した首飾りで、飾り板がシトキと呼ばれるため、首飾り全体がシトキと呼ばれるものである。飾り板は金属製のものが

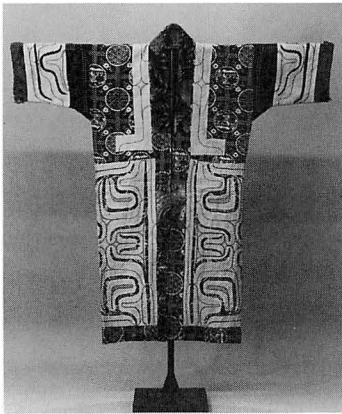


図5a カバラミン(前面)



図5b カバラミン(後面)

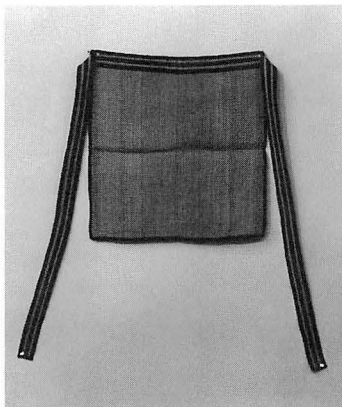


図6 マエタリ1

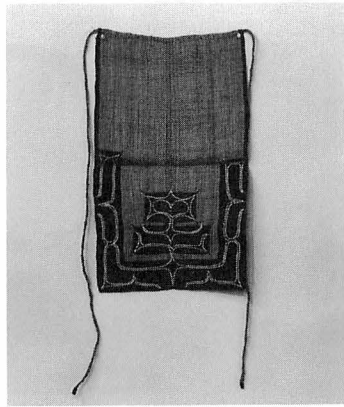


図7 マエタリ2



図8 首飾り1

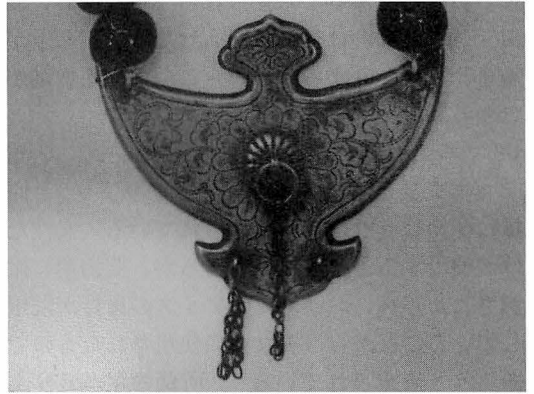


図8-2 首飾り1 (部分)



図9 首飾り2

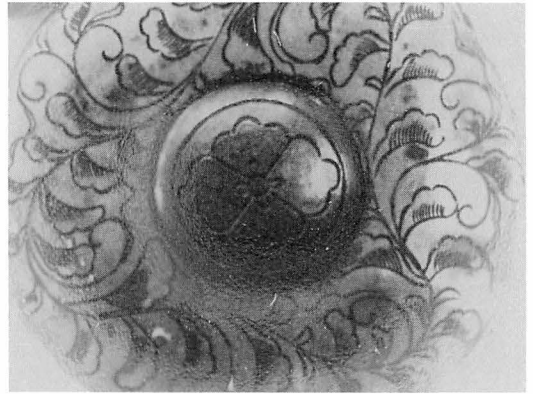


図9-2 首飾り2 (部分)



図10 耳飾り

多く、また漆器や彫刻を施した木製のものもある。ガラス玉は大陸や本州から入ってきたものが用いられている。所蔵の首飾り1（図8）においては、色とりどりの大小のガラス玉が42個連なり、中央には、鳥が翼を広げた姿を模ったような金属製のシトキが配されている（図8-2）。首飾り2（図9）は36個のガラス玉に円形のシトキが配されている。このシトキの中央には、花菱の紋が施されている（図9-2）。

4.4. 耳飾りについて

耳飾りの素材には真鍮や銀、鉛が使用され、大きさは直径5～20cm位とさまざまあり、針金状の金属を曲げて装飾された金属の玉やガラス玉などがつけられた。儀礼の時などに老若男女問わず身に着けられたが、明治9年に同化政策の一環として、男性の耳輪着用に対する禁止令が出された。所蔵の耳飾り（図10）は金属の装飾された玉が付き、本来では耳穴に装着するために穴に入りやすいように細く作られている端に飾り玉が付いている。しかも、この飾り玉は取外しができず耳穴に通らないため、このままでは使用できないであろう。端末部分の飾り玉は後から付けられたものなのか、その解釈については今後の課題である。

5. まとめ

今回の調査により、主に衣服資料について制作年代、制作地など各々の特徴が明らかになった。今後はこれらがどのような意味を持つのかを考察することが課題となる。また、学校教育においてアイヌの歴史や文化を学ぶことが求められている今、このような資料が果たす役割は大きい。

アイヌの服飾をみると、人々が自分たちの手に入るものを最大限に活用できるよう工夫をし、生活していたことを読み取ることができる。これはアイヌの文化を理解すると共に、我々の生活を見直す機会ともなるだろう。

参考・引用文献

- 1) 北海道立記念美術館、(財)アイヌ文化振興・研究推進機構編(2006)『アイヌ文様の美』P.17
- 2) 『読売新聞』2009年9月14日朝刊「論壇」
- 3) 津田命子著(2008)『アイヌ刺しゅう入門チヂリ編』株式会社クルーズ P.13
- 4) 四辻一朗編(1981)『アイヌの文様』笠倉出版社P.153
- 5) 1)に同じP.199